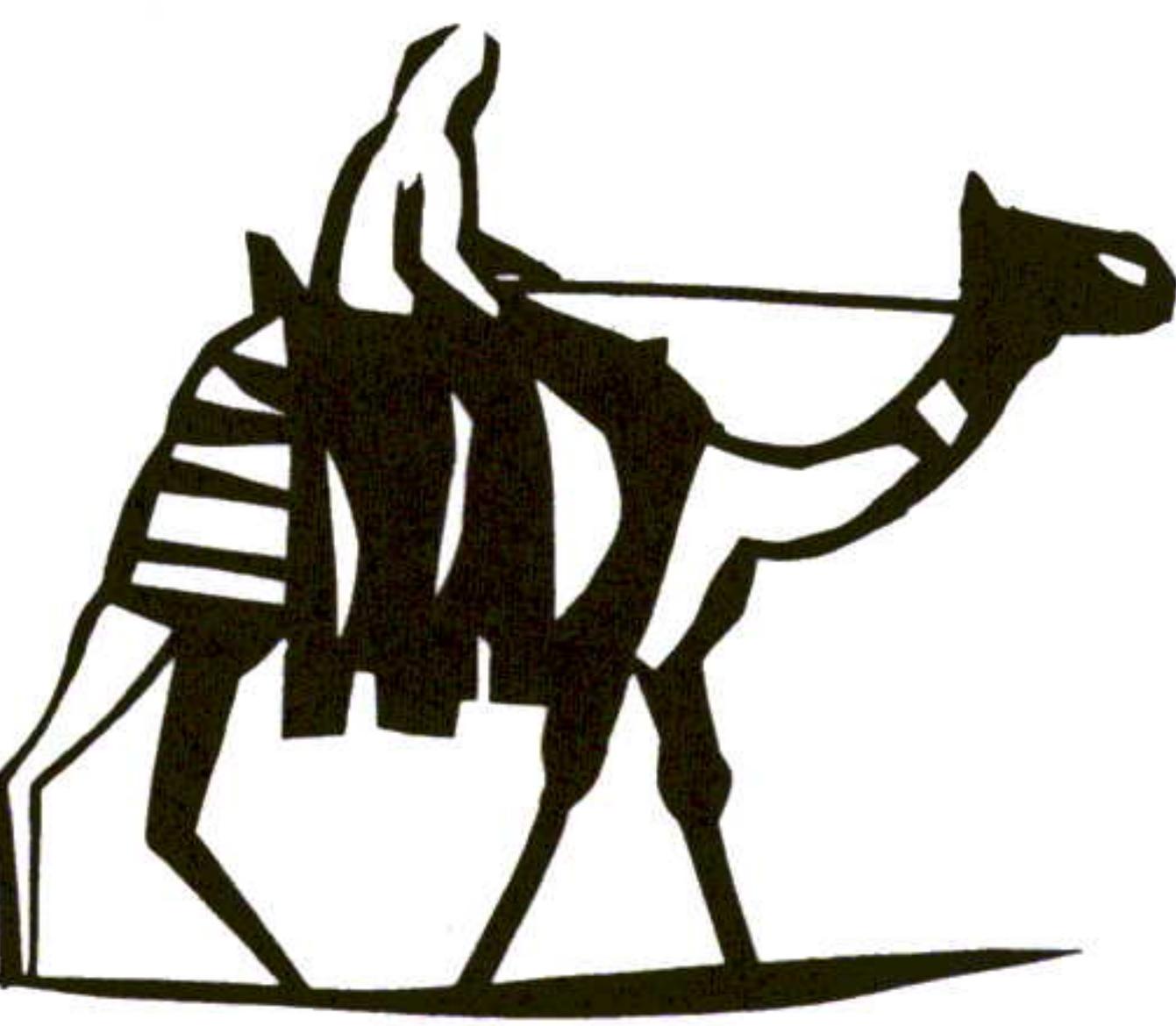


モラン、エドガール／菊池昌実・高砂伸邦訳

一九九九『E・モラン自伝・わが雑食的知の冒険』、四

八頁、法政大学出版局。

(国内客員研究部門担当教官 一橋大学経済学研究科教授)



## カレンの民族舞踊コンテスト

加藤昌彦

滞在することができただけだった。

KNUの弱体化と観光地化により、州都パアンの周辺は治安がよくなつて、徐々に外国人観光客にも旅行許可が出やすくなつていった。今では、特別な許可をもらわなくとも、パアンとターマニヤ僧正の住むターマニヤ山にだけは、外国人も入れるようになつてからまだ数年しかたつていな

い。ビルマ有数の少数民族であるカレン人の言語を研究している私にとっては、ずっとあこがれの地とも言うべき土地だつたのだが、このような事情があつたため、ほぼ定期的に通うようになったのはごく最近の九七年以降のことである。留学でビルマにいた九二年から九五年にかけては、一度だけ旅行許可がおりたものの、たつた数日間

(ミャンマー)のカレン州の州都パアンを訪れた。私にとっては五回目のカレン州である。この地域は外国人の入域が極めて困難だったところで、外国人旅行者が入れるようになってからまだ数年しかたつていな

い。カレン州がなぜ外国人に開放されていなかつたかというと、ここが、ビルマからの独立や自治権の拡大を目指す武装組織、カレン民族同盟(KNU)の勢力範囲に入っていたからである。その状況が変わりはじめたのは、九五年くらいからだつた。九四年の暮れごろから、一部の仏教徒の離反によりKNUの足もとはぐらつきはじめ、難攻不落と言われたコムラや総司令部のあつたマナプローなどの重要拠点があいついで陥落した。一方、ちょうど同時期、パアン周辺は小規模ながらも観光地化していく。

前記のとおり、私は九七年から毎年パアンに通つている。これまで、日本で休みのとりやすい二月から三月にかけて行くことが多かったのだが、今回は一一月に行くこととした。というのは、一月の七日は、

一九五一年一一月七日にカレン州が設立されたことにちなむカレン州記念日で、その日にカレンの民族舞踊のコンテストが行われることを知っていたからである。



写真1 カレン州の風景

テストを是非一度見てみたいと、ずっと思っていた。今回やっとその機会に恵まれたのだった。

カレン州記念日のドン・ダンスのコンテストは、一九六〇年代の半ばから開催されるようになったという。今年のコンテストは一月七日から四日間にわたり、毎晩七時から深夜一二時ごろまで行われた。カレン州全土から今回は二〇チームの舞踊団が集まつた。初日に一〇チーム、二日目に一〇チームが踊り、最初の二日間の点数にもとづいて、まずは、上位一〇チームのAグループと、下位一〇チームのBグループに分けられた。その上で、それぞれのグループで賞を争う。三日目にBグループが、最終日の四日目にAグループが踊りを競つた。Bグループで入賞しても、しょせんはAグループよりも下なのだから、意味がないようにも思えるのだが、労をねぎらうために賞を出しているということだった。私は、ドン・ダンスについては一家言もつてゐるカレンの人たちの論評を聞きながら、全

部の踊りを鑑賞した。

前評判が高かったのは、パアンから四〇キロほど北東に行つたところにあるフラインボエという町の代表、パアンから八〇キロほど南東に行つたところにあるコーカレイという町の代表、パアンの選抜チーム「ミヨードー」、パアン郊外にあるフラー・カミンという村の代表、の四グループである。結果は、フラー・カミン村が優勝、二位はフラインボエ、三位はミヨードーという順当なものだった。

踊りの採点基準は多岐にわたつてゐる。踊りそのもののうまさは当然として、振りや隊列に創意工夫はなされているか、歌詞の内容が良いか悪いか、衣装が美しいかどうか、全員の踊りがそろつているかどうか、鳴り物の演奏レベルが高いかどうか、などなど、総合的に採点される。そのため入賞するのは相当難しい。私は留学中、首都ヤンゴンのカレン正月の催しで開かれるドン・ダンスのコンテストを毎年見ていたが、



写真2 優勝したフラー・カミン村の踊り

の振動、歌の合間に聞こえるフネー（ビルマの伝統的管楽器）の美しい高音、などなど、挙げればきりがない。

この踊りを踊るのは、カレン州に住むポー・カレンの人々である。カレン人にはスゴー・カレンとポー・カレンという二大グループがいて、両集団とも、このカレン州周辺とイラワジ河のデルタ地帯に住んでいる。同じカレンでも、スゴー・カレンやデルタ地帯に住むポー・カレンはこの踊りを踊らない。カレン州のポー・カレンは、歌も多いし、最近はすたれててしまつていて、踊りの得意な人々で、即興で歌を作る人が多いし、最近はすたれててしまつていて、「オーボエ」と呼ばれる歌垣もある。私は、一〇年ほど前にスゴー・カレン語の勉強を開始し、その後、デルタ地帯のポー・カレン語を研究の中心に据えたのは、私が彼らの芸能に魅了されていたことと無関係ではない。だからドン・ダンスのコン

術の差が歴然としている。ヤンゴンで優勝しても、カレン州ではAグループにも入れないだろう。

前評判の高かったフラインボエ、コーカレイ、ミヨードー、フラー・カミンなどのグループの踊りは観衆を魅了した。一方で、カレンに興味を持つ者として大変面白かつたのは、現在のカレン州情勢をそのまま反映しているとも言える、キワモノ的なグループの存在であった。以下、主なものを挙げてみる。

#### ● DKB Aの代表

DKB Aというのは、「民主カイン仏教徒同盟」の略称で、一九九四年の騒乱でKNUから分離した仏教徒主体の武装集団である。カレン人には全体としては仏教徒が多いのだが、KNUの中ではキリスト教徒が権力を持つという構図が続いていた。これが不満を持った一部の仏教徒が、KNU幹部に反旗をひるがえし、敵だつたはずのビルマ軍にくみして、KNUの総司令部があ

あつたマナプローを陥落させた。ビルマ政府の信頼を得たDKB Aは、以降カレン州において我が物顔にふるまつてゐる。彼らは、DKB Aの英語呼称においてカレン(KAREN)をKAYINとビルマ語風に呼んでいることにも現れている。当地のカレン人たちは、DKB Aはならず者だと言い、仏教徒カレンでさえも彼らをあまり信用はしていないようである。踊りは比較的うまかつたが、Bグループだった。

#### ● ミヤインジーイー門前町の代表

一九九四年に仏教徒の一部がKNUから離脱する原因になつたきっかけは、ミヤインジーイー僧正という僧侶の信者たちがパゴダをタイ・ビルマ国境近くの丘の上に建てたことだつた。これが軍事上の標的になることを恐れたKNUの幹部たちは、パゴダの取り壊しを仏教徒に命じた。ところが仏教徒たちはこの命令に従わなかつたため、KNUの分裂という事態につながつていつ

たのである。パアンから舟で北へサルウイン河を数時間さかのぼつたところに、この町が代表を送り込んだ。下馬評にものぼらなかつたが、いざ踊つてみるとレベルが高く、Aグループの四位にくいこみ、惜しくも三位入賞をとりのがした。

#### ● カルト集団「パー・タキ」の代表

一九九〇年代に入り、パアンに住む一人の青年が、夢で啓示を受け、自分をアーティスト的集団を結成した。この信者たちは、ゾエカビン山という山のふもとで、カレンの伝統(と彼らが信じる)様式を守り、集団生活をしている。まわりのカレン人たちは少なからず不気味がつてゐる様子である。この集団の信者たちは全員がカレン独特の髪を結つてゐる。当然、ドン・ダンスの踊り子たちも髪を結つており、踊りの振り付けも独特なので、コンテストでこの代表が

踊つたときは、異様な雰囲気が会場にただよつた。踊りは相当にレベルが高かつたが、Bグループに入れられ、入賞もしなかつた。審査員たちも、踊りがうまいぶん、逆にどのように評価すべきかとまとめているようだつた。この地域のボー・カレンには、なぜかこのようなカルト集団が多い。他には人類学の世界では比較的有名なタラコンやレー・ケーなどの集団がある。

#### ● モンチャリー村の代表

前述したように、前年のフラインボエ代表の踊りを真似たものだつたため、Bグループに入れられてしまつた。

#### ● スゴー・カレン村の代表

今年はスゴー・カレンの村が二村、ドン・ダンスの代表を出し、どちらもスゴー・カレン語で歌つた。スゴー・カレン語とポー・カレン語は、音韻体系に大きな違いがあるので、スゴー・カレン語で歌うのとポー・カレン語で歌うのとでは、歌の聞こえ方も相當に違つてくる。最初にスゴー・カレン語で歌いはじめたとき、驚いたのか、観客がどよめいていた。二つの舞踊団のうちの一つは、Bグループで入賞するほどにうまかつたが、もう一方は、私のような素人の目にもそれと分かるほど技術がつたな

く、これを見ればドン・ダンスがいかに難かしいことを示す。踊りは良か

しいかをかえつて認識することができるほどだつた。

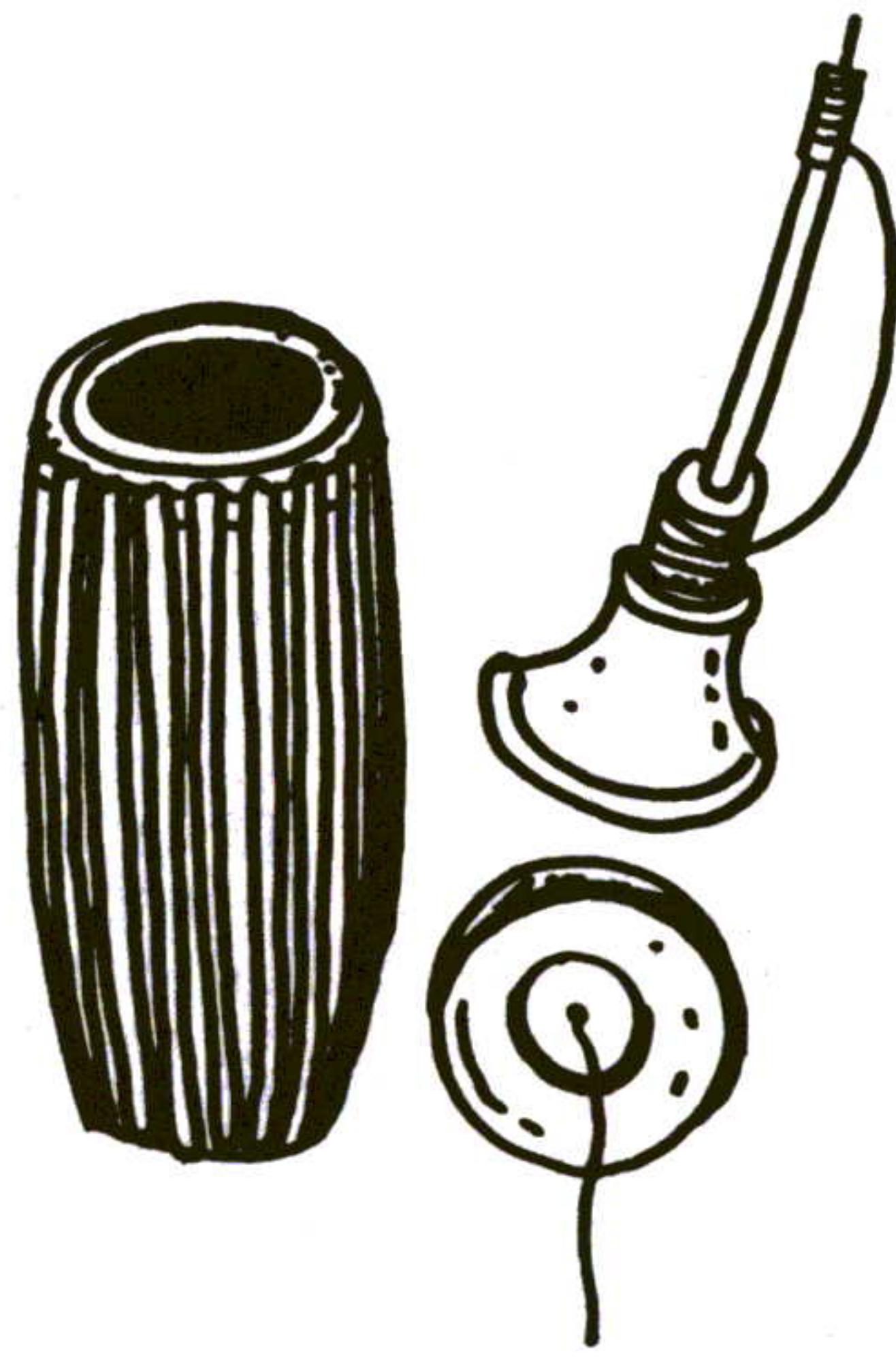
#### ● ミヤワディーの代表

タイとの国境に、ミヤワディーという町がある。ここは以前、密貿易が盛んだつたところである。KNUが弱体化してから、ここはタイ・ビルマ間の貿易の拠点となり、急速に発展してきた。現在では、ムーイ川をはさんだタイ側の町メーソットとの間に橋もかかり、にぎわつてゐる。数キロ北には、かつて、難攻不落と言われたKNUの基地コムラがあつた。また、メーソットの郊外には難民キャンプがあり、そこに行くとビルマ国内の人権侵害の様子などをうかがい知ることができる。ミヤワディーからはここ数年ずっとドン・ダンスの代表が出て特筆すべきなのは、この舞踊団の構成員の大部分がカレン人ではなくビルマ人だということである。面白いことに、ビルマ人の踊り方はカレン人の踊り方と明らかに違

パアンの郊外、ゾエカビン山のふもとに、キリスト教徒の住むモンチャリーという村がある。村の中は整然としていて、桃源郷的な雰囲気がただよつてゐる。ドン・ダンスには、精靈信仰的な祈りの要素が部分的に組み込まれてゐることがあるため、ドン・ダンスを踊ることは、必ずしもカレン人キリスト教徒の信念にそぐわない。したがつて、キリスト教徒がドン・ダンスを踊ることはあまり多くないのだが、今年はモンチャリー村も代表を出した。踊りは良か

つたのだが、前年のフラインボエ代表の踊りを真似たものだつたため、Bグループに入れられてしまつた。

今年はスゴー・カレンの村が二村、ドン・ダンスの代表を出し、どちらもスゴー・カレン語で歌つた。スゴー・カレン語とポー・カレン語は、音韻体系に大きな違いがあるので、スゴー・カレン語で歌うのとポー・カレン語で歌うのとでは、歌の聞こえ方も相当に違つてくる。最初にスゴー・カレン語で歌いはじめたとき、驚いたのか、観客がどよめいていた。二つの舞踊団のうちの一つは、Bグループで入賞するほどにうまかつたが、もう一方は、私のような素人の目にもそれと分かるほど技術がつたな



(前、博物館民族学研究部助手  
現、大阪外国语大学外国语学部助教授)

少数民族の結束を政府が恐れていることが一因になつてゐると聞いた。

カレン州記念日のコンテストがなくなつたらどうするのか?このコンテストは多くの人が楽しみにしている。別の機会に参加者主体でやるしかないだろうというのが私の友人の案だったが、それだと財政的に苦しい。私にとっては気がかりのひとつだ。

う。ビルマ人がドン・ダンスを踊ると、どうしてもビルマ踊りのクセが出てしまうようだ。ミヤワディーの代表は、入賞こそしなかつたが、Aグループに入った。カレン人の友人によれば、ミヤワディー代表がさしてうまくもないのにAグループに入つたのは、ビルマ人の面目をたてる意味合

いがあるだろうということだった。

以上のような、カレン州の情勢を直接に反映したようなキワモノ的舞踊団が次から次へと出てくるので、私は、自分がカレン州に来ているという実感を味わわずにはいられなかつた。カレン州に入るのが難しか

ところが、連邦記念日の民族舞踊祭は近年、規模が小さくなつてきていて、例えばカレン州代表はこれまで三二人のドン舞踊団を派遣していたのが、最近では二四人の舞踊団しか派遣できなくなつた。これも、少



写真3(上)、4(下) 連邦記念日の民族舞踊祭にドン舞踊団を派遣するため、希望者の中から優秀な踊り手を選ぶ。その選抜風景。

つた時期を知つていればこそその実感だつたと思う。また、踊りそのものも、思つた以上に感動的だつた。

ところが、カレンの友人から、残念ニュースを聞いた。このコンテストは今年が最後になるかもしれないというのである。ビルマ政府は、この催しがカレン人の結束力を強める要因になることを恐れているというのだ。

同様の理由で、二月一二日の連邦記念日の民族舞踊祭のためにヤンゴンに派遣するドン舞踊団の規模も、小さくせざるを得ない状況だという。毎年、カレン州記念日のコンテストの出場者の中から優秀な踊り手を選抜し、連邦記念日の民族舞踊祭でカレン州の代表としてドン・ダンスを踊らせる。選抜された者にとつては名誉なことである。ところが、連邦記念日の民族舞踊祭は近年、規模が小さくなつてきていて、例えばカレン州代表はこれまで三二人のドン舞踊団を派遣していたのが、最近では二四人の舞踊団しか派遣できなくなつた。これも、少